

# 近代教育における漢文教科書教材の変遷

小金澤 豊

## 一 はじめに

一八七二年〔明治五年〕の学制発布以来、日本の近代教育制度は段階的に形を整えてきた。制度的にも、カリキュラムにおいても、西欧諸国の教育制度を自国に移入しようという姿勢が色濃く感じられる。

その中であって、漢文教育の分野で、江戸期以来の伝統を残しつつも、新しい時代に適合しようとする動きが感じられる。とりわけ、文章というジャンルにおいては、ある傾向が顕著に現れていることが確認できる。そして、一九四五年〔昭和二十年〕の終戦を契機として、我が国の教育制度は大きな方向転換を迫られることとなり、それは今日に及んでいる。

今日の漢文教科書に占める文章教材は、質・量ともに明治期から昭和戦前期までの教科書教材とは比較すべくもない。著しい削減のされ方である。とくに、邦人の漢文教材において、それは顕著である。

では、漢文教科書を明治から大正、昭和戦前期・戦後期と比較していったときに、文章ジャンルに見られる傾向とは、

どのようなものであるのか。また、その背景にはどんな問題が考えられるか。そして、戦後の転換期を経た現在の状況はどうであるのか。その状況について、主にテキスト教材として挙げられた作品を検討することによりながら、考察を加えていきたい。そして、現在では削除されているかつての邦人作品の中に、今後の漢文の教材として見るべきものはないかという点についても言及していきたい。

## 二 江戸期の文章の伝統から

まず、江戸期には、テキスト教材として何が重要視されてきたかということから考えていく。

神辺靖光は、「化政から天保嘉永にかけて名文佳章を尊重崇拜する風が起り、文章作法に関する書籍が夥しく版行されるようになった。かくして漢学は本流としての儒学と並んで詩文も大きな流れをつくるようになった<sup>(1)</sup>」として、四書などの儒学の經典と同等の位置に、漢詩文が据えられるようになっていく傾向を述べている。

齊藤拙堂の『拙堂文話』には、拙堂自身の文章観がよく表れている。「西土文章日衰、宋不及唐、明不及宋、清不及明<sup>(2)</sup>」というように、中国では唐以降の文章は衰えを見せていくが、わが国については「本邦文章日隆、元祿勝元和、享保勝元祿、天明寛政勝享保<sup>(3)</sup>」として、わが国はこれとは反対に時代が進むに従って文章が盛んになってきていると言っている。

とくに韓愈に対しての賞賛は大きく、「韓子之文、前無故人、後無繼人」「韓公道德学識既高、而事業亦不卑<sup>(4)</sup>」として、特別扱いをしている。どうして韓愈がこうも優れているのかといえば、「韓柳諸公之文、皆原本経、又各取其性所近専治之。韓之孟子、柳之国語、欧之韓文、蘇之国策、曾之劉向、是也<sup>(5)</sup>」と述べている。つまり、韓愈をはじめとする唐宋の諸家は、それぞれが自分の内面氣質に合った、確固としたよりどころとなるものを持ちながら、自己の特質を開花させていったというのである。そして、「韓原道諸篇、直継孟子。柳無此種作、韓柳優劣、正在此<sup>(6)</sup>」とあるように、韓愈には孟子の思想を

継承する「原道」などの作品があることが、柳宗元の及ばないところであると強調しているのである。

また、拙堂には、他にも「韓文公贊」<sup>(7)</sup>という文章がある。

- (1) 神辺靖光「幕末維新期における漢学塾」〔『幕末維新期漢学塾の研究』溪水社、二〇〇三年〕
- (2) 『拙堂文話』巻一 一八三〇年 古香書屋版
- (3) 『拙堂文話』巻一 同右
- (4) 『拙堂文話』巻三 同右
- (5) 『拙堂文話』巻五 同右
- (6) 『拙堂文話』巻三 同右
- (7) 『拙堂文集』巻六 同右

### 三 教授要目に見る教材例

江戸から明治になり、学制が発布されて以来、我が国の近代教育制度は徐々に枠組みが整えられていった。一八七九年〔明治十二年〕の教育令、翌一八八〇年〔明治十三年〕の改正教育令を経て、一八八六年〔明治十九年〕の各学校令の公布に及んで、我が国の教育制度の基本が、ほぼ確立された。文部省から出されるその後の法令は、これらの学校令をより確実なものにするための役割を担うものであった。中でも、一九〇二年〔明治三十五年〕には、中学校教授要目が示されて、どのような教材を学校現場で扱うべきかという指針が示された。

そこでは、どのようなものが掲げられていたのか。次に、「国語及漢文」科の中で、具体的な教材例が挙げられている箇所だけを取り出して見てみる。<sup>(1)</sup>

《明治三十五年中学校教授要目に見る教材例》

講読ノ材料

国語

小学校ニ於ケル国語トノ連絡ヲ図リ今文ヲ用ヒテ修身、歴史、地理、理科、実業等ニ関スル事項ヲ記シタル現代作家ノ平正ナル記事文、叙事文等ヲ採ルヘシ又普通文今文ノ外正確ナル口語ノ標準ヲ示スヘキ演説、談話ノ筆記並ニ現代名家ノ書牘文及新体詩ヲモ含マシメテ可ナリ其ノ程度ハ文部省編纂高等小学校用読本ノ第六卷及第七卷ニ準スヘシ

〔第一学年〕

今文

前学年ニ準シ又現代作家ノ論説文ヲ加フ

近世文

今文ニ最モ近キモノ例ヘハ、橘南溪ノ東西遊記、伴蒿蹊ノ近世奇人伝、貝原益軒ノ訓戒書類、成島司直ノ徳川実記付録ノ類

〔第二学年〕

室鳩巢ノ駿台雑話、安藤年山ノ年山紀聞、新井白石ノ読史余論、本居宣長ノ玉勝間ノ類

〔第三学年〕

新井白石ノ折焚柴の記、太宰春台ノ経済録ノ類、但稗史ノ類ト雖モ教育上ノ目的ニ戻ラサル限ハ之ヲ採ルヲ可トス

〔第四学年〕

近古文

鎌倉室町時代ノ文、例ヘハ保元平治物語、神皇正統記、十訓抄、樵談治要ノ類

〔第三学年〕

韻文

主トシテ今様歌

漢文

初ヨリ文意完結セル全編ヲ採ルコトヲ要セス第一学期ニ於テハ単語単句ヲ挙ケテ其ノ組織ト国語ノ組織トノ異同ヲ示シ第二学期以後ニ於テハ我国近世作家ノ用語平易ニ構造簡易ナル短章ニ句読、返り点、送り仮名ヲ施シタルモノヲ授ケ時々既ニ課シ了リタル国語ノ一二節ヲ漢訳シタルモノヲモ交ヘテ之ヲ対照セシムヘシ

〔第一学年〕

我国近世作家ノ簡易ナル叙事文或ハ伝記、紀行等ノ文意完結セル短編ヲ加フ、例ヘハ頼山陽ノ日本外史、大槻磐溪ノ近古史談、塩谷宕陰ノ宕陰存稿、安井息軒ノ読書余適ノ類

〔第二学年〕

我国作家ノ論説文ヲ加フ、例ヘハ頼山陽ノ日本外史ノ叙論ノ類

〔第三学年〕

散文  
支那作家ノ簡易ナル伝記、紀行等ノ文ヲ加フ、例ヘハ清初作家、唐宋八家ノ文、佐藤一斉、松崎慊堂ノ文ノ類

〔第四学年〕

史記、蒙求、論語ノ類ヲ加フ

〔第五学年〕

詩

唐詩選ノ類

この教授要目の記述を見ると、邦人の作品が、読むべき教材として圧倒的な分量を占めていることがわかる。しかし、現在の目から見ると、ここに掲げられた邦人の名前は、国語科だけでなく、社会科の歴史的分野の中でさえ、学校教育の中ではほとんど触れられることのない人物となってしまうている。一体何の理由があって、そうなってしまったのか。後ほど考察を加えていくことにしたい。

(1)「官報」明治三十五年二月六日

#### 四 漢文教科書と邦人の教科書掲載教材

では、右のような教授要目の記述に従って編纂された、実際の漢文教科書の教材には、どのような作品が収められているのか。その状況について、簡野道明編『改修新編漢文読本 卷一』(明治書院・大正十年改修版)に取り上げられている教材とその作者を、次に見ていく。

藤田 彪「日域三絶」

中村 和「黒田如水」「武将宜如此」「寧坐溺」「咬菜軒」

原 善「除日講起」「孔子廟」「孔孟之道」「亢顔談経」「甘藷先生」「兼山遠慮」

角田 簡「油断大敵」「衛生在口腹」

土屋 弘「幾万愛児」「將軍一絶」

安井 衡「多賀城碑」「敬師」「三計塾記」

青山延于「家康食麦飯」「養老孝子」「文教始興」「仁德天皇」「菅公忠愛」「延喜・天曆之治」

「林間煖酒燒紅葉」「重矩寬厚」「橫槩賦詩」「勸農詔」

青山延寿「伊勢神宮」

塩谷世弘「万事之病根」「忠勝好讀書」「忠興譬喻」

岡田 僑「孝高羹魚骨」

重野安繹「孝百行之本」「板鼻檢校」「早起之益」「築江戸城」

「山林之利」「始至欧州」

岡 千仞「華盛頓誠信」「讀書至廢眠食」

大槻清崇「蘭丸誠慤」「鉄牛」「臨死戒子」

木内 倫「高虎公直」

頼 襄「謙信義勇」「十有三春秋」「清正忠誠」「幼有器量」「泰時友愛」

藪 慤「信玄四旗」

中村正直「勿譏聾者」「記甚助事」

安積 信「再有十四歳乎」

依田百川「浴潮之效」「宮城」

中井積善「秀吉城大阪」

岡松 辰「歌学」

齊藤 馨「東海道第一之勝」「君臣相遇」

大槻修二「東京」

梁川孟緯「大楠公」

貝原篤信「以忘初為誠」「用財法」

菊池 純「義農救饑」

岡本監輔「拿破崙剛毅」「松下聯璧」

齊藤正謙「刻苦研業」「間宮窮滿洲」

東條 耕「泰山堅忍」

林 長孺「浜天竜川」「題遠州郡齊」

塩谷時敏「近藤守重」

佐藤 坦「格言」

吉田矩方「臨別与諸生」

久阪通武「渡辺崋山」

朱 熹「勸学文」「一寸光陰不可輕」

いうまでもないが、この場合の「巻一」とは、第一学年で履修する内容の教材、ということである。

さて、こうして、当時の漢文教科書に掲載されている作者名とその作品名を眺めて見ると、朱熹を除いたすべてが、邦人の著作を教材化したものであることがわかる。その作者について言えば、名前を一瞥しただけでも、現在ではほとんど



なじみがなくなってしまっているものの多さに、改めて気づかされる。紙面の関係から、右は前述の教科書の巻一だけに限っているが、漢文の「文章」という分野で言えば、この傾向は他の巻についても同様のことが言えるのである。

この他、巻一に取り上げられた以外の作者名について、他の巻から探してみると、

巻二には、川北長顙、会沢 安、頼 惟柔、藤井 啓、河野 熊、斉藤一徳、山田 球、柴野邦彦、尾藤孝肇、石川 凹、川田 剛、巖垣松苗、阪田丈平、広瀬 建、菅 晋帥

巻三には、板倉勝明、佐久間啓、三島 毅、青山延光、竹添光鴻

巻四には、元田永孚、物 茂卿、森田 益、芳野世育

巻五には、徳川斉昭

といった名前が並んでいる。

これら邦人の名前は、現在ではほとんど忘れられてしまっているが、彼らの在世当時はもちろん、広く戦前まではよく知られた名前であったことが、これだけ教科書に取り上げられていた作者であったということからもわかる。

柴野邦彦を例にとってみると、現在では国語科はもちろん、社会科の教科書にも「寛政異学の禁」とか「寛政の改革」という語句の説明はなされていても、柴野邦彦、尾藤二洲、古賀精里の「寛政の三博士」の名前は載せられていない、と

というのが現状である。また、当時は大変な知名度であった頼山陽にしてさえ、現在の教科書の中ではほとんど取り扱われていないのである。

これにはいったい、どのような経緯があるのだろうか。

## 五 終戦と墨塗り処置

終戦直後に、教科書はいわゆる「墨塗り」措置を行われ、それまでの教科書教材の見直しを迫られた。

そのためには、どのように内容の見直しをはかるかが検討されなければならない。それには、一定の価値基準に照らし合わせながら、教材内容の良否を判定するという方法がとられた。

では、否定されるべき戦前までの教科書教材の内容とは、いったいどのようなものであったのか。中村紀久二は、このことについて、「GHQ / SCAP・“Education in the New Japan”」および「マ司令部民間情報教育部教育班資料解説・教材削除の基準をどこにおくか」（『日本教育』昭和二十一年五月号所収）を引用して、「（一）超国家主義 （二）軍国主義 （三）宗教的差別」という三つの柱が削除基準として設けられたと、次のように言っている。

### （一） 超国家主義

- ① 大東亜共栄圏の原理およびその他侵略思想の原理を高めようとする教材。
- ② 日本人は他民族又は他国民よりも優秀とする思想を唱導する教材。
- ③ 国際連合憲章の中に示された諸原則に違反する思想と態度を有する教材。
- ④ 天皇には絶対の忠誠を尽すべきとする思想、天皇は他国の元首よりも優秀とする思想、および天皇制は神聖に

して冒すべからざるものとする思想を宣伝する教材。

## （二） 軍国主義

① 戦争は紛争を解決する英雄的にして承認される方法であるとして、戦争を賞讃し、軍国主義侵略の精神を高めようとする教材。

② 絶対の忠誠をもって天皇のため死ぬことを賞讃することを促進する教材。

③ 軍事的功績を賞讃して軍神を理想化する傾向を有する教材。

④ 軍人として務めることは最大の愛国の方法であるとする思想を發展させる教材。

⑤ 大砲、軍艦、戦車、要塞のような軍事的物事を賞讃する教材。

## （三） 宗教的差別

① 如何なる宗教の教義、信条および哲学を是認し、促進する教材。

② 如何なる宗教の儀礼、祭式および勤行に関する教材。

③ 国家で支持される学校において如何なる宗教的儀礼、祭式、儀式の目的となるもの。

この教科書教材削除の基準は、その後の暫定教科書、さらには民間発行検定教科書の編纂にあたって絶対に遵守すべき規準とされたのである。<sup>(1)</sup>

以上のような、中村が示した三つの基準に照らし合わせてみると、多くの邦人の漢文はその条項に抵触してしまう内容の教材だと考えられたからだろうか。戦後の漢文教科書の邦人の教材は、一挙に激減する。

ここで、いくつかの戦後の漢文教科書教材を見ていく。明治以降、漢文教材の中でも大多数を占めていた邦人の著作がどのような扱いになっていったかということの一端を、垣間見ることができよう。

最初に、明治書院の『新編高等漢文』（昭和一九年）を見る。

どの巻にも「邦人の漢文」と題された章があり、それぞれの巻の内容は、以下の通りである。

卷一 安井 衡「三計塾記」

柴野邦彦「雛鶯説示塾生」

积 月性「題壁」

広瀬 建「桂林荘雜詠示諸生」

西郷隆盛「逸題」

竹添光鴻「蜀棧道」

森林太郎「過福建」

夏目金之助「鋸山」

藤井 啓「花朝下澱江」

积 苔岷「松島」

成島 弘「那耶哥羅觀瀑」

佐藤 坦「言志四録抄」

卷二 頼 襄「泊天草洋」

服部元喬「夜下墨水」

菅 晋帥「先妣十七回忌祭」

木戸孝允「偶成」

菊池 純「市川白猿」「滝沢馬琴」

中井積徳「鬻蕎麴者伝」

卷三 「古事記」

「万葉集」

「懷風藻」

「和漢朗詠集」

「古今和歌集序」

このように、ここに見られる漢文教材は、国家主義的、軍国主義的な内容や宗教関係色を除外しながらも、なお相当の分量を残した編集であることがわかる。しかし、戦後も次第に年を重ねていくと、乗せられる邦人作品の分量がどんどん減っていく。

『漢文 古典一乙』（明治書院・昭和三八年）では、「邦人の詩文」として、

菅 晋帥「冬夜読書」

藤井 啓「芳野」

釈 月性「題壁」

頼 襄「泊天草洋」

広瀬 建「桂林莊雜詠示諸生」

木戸孝允「偶成」

塩谷世弘「送安井仲平東遊序」

が載せられているようになっている。

そして、『精選古典Ⅰ漢文編』（明治書院・平成十年）『古典Ⅱ』（明治書院・平成十二年）では、「文」という項目に韓愈や柳宗元など中国の文章家の文は載せられているが、邦人の作品は見あたらなくなっている。

大修館書店の『高等漢文』（昭和二十七年）では、

卷一 広瀬 建「桂林莊雜詠示諸生」

塩谷世弘「送安井仲平東遊序」

卷二 木戸孝允「偶成」

坂井 華「売花翁」

卷三 「古事記」

「日本書紀」

聖徳太子「復煬帝書」

という作品が扱われており、『新高等漢文』（大修館書店・昭和三年）では「近世の日本漢文」という項目を設け、以下の教材が載せられている。

卷一 柴野邦彦「進学諭」

釈 月性「題壁」

広瀬 建「桂林莊雜詠示諸生」

頼 襄「述懐」

原 善「蕃山求良師」

卷二 柴野邦彦「詠富士山」

頼 襄「送母路上短歌」  
「耶馬溪図巻記」  
「泊天草洋」

木戸孝允「夜坐思亡友」

徳川光圀「梅里先生碑」

また、卷三には、「上代の日本漢文」という項目で、「古事記」「日本書紀」や聖徳太子の「復煬帝書」「十七条憲法」、「万葉集」や「菅家後集」から教材が採られている。

『高等学校漢文』（大修館書店・昭和五八年）になると、「白楽天と日本文学」という項目が設けられ、

- 一 白楽天と菅原道真
- 二 長恨歌と源氏物語
- 三 和漢朗詠集選

という三部構成で教材が配置されるようになっていく。白楽天のように日本人に馴染み深い中国の詩人を入り口にしながら漢文学と日本文学の関係を考えるという同教科書の方針は現在まで受け継がれているようで、『古典Ⅱ』（大修館書店・平成八年）でも「白楽天と日本文学」という章立てがなされている。このような、白楽天に関係する日本文学に焦点をしばった内容構成は、教科書会社の編集の特色を色濃く出したものとして、評価できる試みと言える。

一方、白楽天関係以外の邦人の作品はどうかというと、『古典Ⅰ』（大修館書店・平成十一年）では、「日本の漢詩文」という章に、

菅茶山「冬夜讀書」

広瀬淡窓「桂林莊雜詠示諸生」

月性「将東遊題壁」



藤井竹外「芳野」

西郷南州「偶成」

原 念斎「仁斎赤貧」

頼山陽「所争在弓箭」

大槻磐溪「雲横秦嶺家何在」

といった作品が、教材として採られている。

戦後、先に見た「絶対に遵守すべき規準」<sup>(2)</sup>とされた教科書の削除基準に照らし合わせての教科書教材の編集作業が、具体的に、どのように効力を発揮してきたかについては、今後の研究課題としたい。

しかし、結果として、多くの邦人の漢文が、「(一) 超国家主義 (二) 軍国主義 (三) 宗教的差別、という項目に抵触するとみなされ、教科書教材からはずされていった。<sup>(3)</sup>そして、現行の教科書では、邦人の作品については、いくつかの高名な「詩」を除くと、いわゆる「文」の分野では、ほとんど見ることができなくなってしまったのである。<sup>(4)</sup>

(1) 中村紀久二「総論・敗戦と教科書」〔『文部省著作 戦後教科書解説』大空社 昭和五九年〕

(2) 前掲書

(3) その顕著な例として挙げるならば、『新編漢文読本』〔明治書院・大正十一年〕巻二の土屋弘「橋中佐伝」「広瀬中佐伝」、依田百川「日本海之戦」などがあてはまるだろう。

(4) 『古典I』〔大修館書店・平成十一年〕は先に見たとおりであるが、他の教科書の様子は以下のとおりである。

『古典I』〔三省堂・平成十一年〕では、各章の最後に「日本の漢詩文」という項目を設け、「山行示同志」〔草場佩川〕、「題自

画」〔夏目漱石〕、「好敵手」〔頼山陽〕、「馬図」〔広瀬旭莊〕、「冬夜読書」〔菅茶山〕が取り上げられている。

『古典Ⅱ』〔三省堂・平成十二年〕は、「日本の漢詩文」という章立てをして、「下岐蘇川記」〔斎藤拙堂〕、「泊天草洋」〔頼山陽〕、「桂林莊雜詠示諸生」〔広瀬淡窓〕、「題鞭駘録」〔塩谷宕陰〕が取り上げられている。

『古典Ⅰ』〔桐原・平成十一年〕では、「日本の漢詩」という章立てをして、「泊天草洋」〔頼山陽〕、「桂林莊雜詠示諸生」〔広瀬淡窓〕、「偶成」〔木戸孝允〕、「無題」〔夏目漱石〕が取り上げられている。

『古典Ⅰ』〔第一学習社・平成十一年〕では、「日本の漢詩」という章立ての中に、「不出門」〔読家書〕〔菅原道真〕、「冬夜読書」〔菅茶山〕、「泊天草洋」〔頼山陽〕、「送夏目漱石之伊予」〔正岡子規〕が取り上げられている。

## 六 中国人の教科書掲載教材から

さて、このような邦人の文章と比べると、中国人の文章の数は巻が進むごとに数を増やしていく。先の『新編漢文読本 卷一』〔明治書院・大正十二年〕では、中国人のものとしては朱熹の文章だけが掲載されているのだが、他の巻はどのような状況であるのか。それを次に掲げる。

卷三 王安石「読孟嘗君伝」

卷四 邵長蘅「夜遊孤山記」、蘇軾「記承天夜遊」、宋濂「送東陽馬生序」、王守仁「立志」、

周惇頤「愛蓮説」、司馬光「諫院題名記」「訓儉示康」、方苞「左忠毅公逸事」、

蘇洵「送石昌言為北使引」、蘇轍「上樞密韓太尉書」

卷五 陶潜「桃花源記」、諸葛亮「前出師表」、蘇軾「留侯論」、「李氏山房藏書記」、「范文正公文集序」、「前赤壁賦」、「後赤壁賦」

李 觀「袁州學記」、韓愈「師說」「雜說」「送溫處士赴河陽軍序」「祭十二郎文」「柳子厚墓誌銘」、「柳子厚墓誌銘」、「張中丞伝後序」、范仲淹「岳陽樓記」、歐陽修「王彦章画像記」、「瀧岡阡表」  
柳宗元「始得西山宴遊記」、「鈇鋸潭記」「捕蛇者説」「種樹郭橐駝伝」、  
蘇轍「為兄軾下獄上書」、「黃州快哉亭記」、李密「陳情表」、曾鞏「撫州顔魯公祠堂記」  
李華「弔古戰場文」、胡銓「上高宗封事」

これらの中国人作者の中では、唐宋の文章家たちの名前が多く目につく。そのことは、戦後においても、教材の分量こそ違え、一貫して変わりが<sup>(1)</sup>ない。

最初に齊藤拙堂の文章に見たように、唐宋の文章家を賞賛し、彼らの文章スタイルを学ぼうとする姿勢は、近世日本の学問の特徴でもあった。先の「教授要目」でも学ばべき教材のひとつとして挙げられていた『日本外史』を著した頼山陽は「拙堂文話序」という文章も書いているが、彼は「続八大家読本序」で、「為文章家言 則沈氏八家之选 既已無用於我」と言い、「八家其最善也」と言っている。<sup>(2)</sup>

また、町田三郎も「それ以前からの唐宋八家を手本とする底流は確固として存在した」と言っている。<sup>(3)</sup>

こうした唐宋の文章家たちの作品は、戦後から現在の教科書に至るまで一貫して多く教科書教材として採られてきたことが確認できる。その中でも、いわゆる唐宋の八大家と呼ばれる人物の作品でも、とくに韓愈、柳宗元は教科書教材の中でもゆるぎない位置を占めながら、現在に至っているのである。

唐宋八家の中には数えられていないが、白楽天の作品はわが国の文学に計り知れないほどの影響を与えてきたが、それを教科書教材の特徴として編集している教科書もあることは、先の「五」の箇所でも触れておいたとおりである。

また、時代としては唐宋の中には入らないが、陶潜の作品などは、その知名度もさることながら、わが国の漢文テキスト教材として根強い人気を有しており、どの時期の教科書教材の中からもはずすことのできない存在となっていることも、各社の教材について、時代を追いながら比較検討していくことにより、明らかにすることができた。

(1) 現行の高等学校教科書の「文章」における掲載教材を眺めてみると、以下のようなになる。

『古典Ⅰ』〔大修館書店・平成十一年〕では、「中国の文章」という章立ての中に「桃花源記」〔陶潜〕、「春夜宴桃李園序」〔李白〕、「雜説」〔韓愈〕、「送薛存義序」〔柳宗元〕が収められている。

『古典Ⅰ』〔三省堂・平成十一年〕では、「文章」という章立ての中に、「桃花源記」〔陶潜〕、「春夜宴桃李園序」〔李白〕、「雜説」〔韓愈〕が収められている。

『古典Ⅱ』〔三省堂・平成十二年〕では、「送薛存義之任序」〔柳宗元〕、「歸去來辭」〔陶潜〕、「祭十二郎」〔韓愈〕、が取り上げられている。

『古典Ⅰ』〔桐原・平成十一年〕では、「詩文」という章立ての中の「文章」という項目に「雜説」〔韓愈〕、「桃花源記」〔陶潜〕、が取り上げられている。

『古典Ⅰ』〔第一学習社・平成十一年〕では、「名家の文章」という章立ての中に「五柳先生伝」〔陶潜〕、「雜説」〔韓愈〕、「傷仲永」〔王安石〕、が取り上げられている。

(2) 『山陽遺稿』巻九

(3) 町田三郎「岡松夔谷のこと」『明治の漢学者たち』一九九八 研文社

## 七ま と め

これまでに見てきたように、明治以降の漢文教科書の文章の教材としては、一九四五年〔昭和二十年〕の終戦までは、邦人の文章が多く採られていたという事実があった。それが戦後になって一転して彼らの名前すら忘れ去られようとしてしまっている現状には、戦後の墨塗り教科書処置による抵触事項を配慮してのことではないかということを考察してきた。もうひとつの特色として、中国人の文章の中では、とりわけ八大家として称えられてきた韓愈や柳宗元をはじめとする唐宋の文章家たちや、わが国の文学に多大な影響を与えた白楽天、それに六朝期の陶潜が好まれ、多く取り上げられてきたことが、我が国の漢文教育史の大きな特徴であることが確認された。

ところが、戦後期も進むにつれ、邦人の教材の多くは削除の対象とされてしまっていて、日増しに掲載教材の数が減ってしまい、今日ではその名前さえほとんど知られない状態となってしまう。

同時に、彼らが文章スタイルとして継承してきた「書」「伝」「説」「記」「序」などのような形式があったということすら、歴史の彼方へと追いやられてしまった。

今後、このような、邦人作品をほとんど一律に排除してしまうという姿勢は、見直されなければならない。過去にあって大きな足跡を残したこれら邦人の名前すら聞いたことがない、まして彼らの書いた文章などはまったく読めないということは、過去の歴史との大きな断絶を意味することにはかならない。それは、本稿で考察してきたように、戦後の墨塗り処置の延長線上に現在の教科書教材採択の方針がとどまっているとしたならば、これは何よりも見直しを急がねばならない問題である。

かつて教科書教材として採られた邦人作品には、今日の価値基準から見てもまったく色あせないものがある。たとえば、

柴野邦彦の「進学諭」<sup>(1)</sup>のような、学問の方法を説いた文章などは、学び方というものを巧みなたとえ話を用いながら説明したものであり、何よりも現在という時代に必要とされる内容のものであるろう。

齊藤拙堂の「梅溪遊記」<sup>(2)</sup>や頼山陽の「耶馬溪図巻記」<sup>(3)</sup>の名前を、今日いったいどれくらいの人が知っているだろうか。一世を風靡した文章であり、邦人の日本の風景再発見としても名高い作品である。戦前期までの教科書にはよく見られた教材だが、現在これらを採録している教科書はない。近い過去に、こういう風景がわが国においてどれだけ愛されていたかを知っておくことは必要であろう。

松崎慊堂の名前は、今日ではほとんど忘れ去られているが、本人の学問の深さも然ることながら、その弟子たちの多士濟々ぶりから見ても看過できない人物である。安井息軒の「賀慊堂松崎先生序」<sup>(4)</sup>や塩谷世弘の「慊堂松崎先生行述」<sup>(5)</sup>は、その人となりをうかがうことができる文章である。

このような人物紹介の文章の書き方には、古来より受け継いできた文章スタイルがある。明治の文章家と称えられた三島中洲の「方谷山田先生墓碣銘」<sup>(6)</sup>や、その中洲の伝記を記した依田百川の「三島中洲先生伝」<sup>(7)</sup>なども併せて載せれば、文章スタイルの理解の一助となるだろう。

頼山陽の『日本外史』<sup>(8)</sup>や大槻磐溪の『近古史談』<sup>(9)</sup>は、日本史上を彩った人物の逸話集としてもおもしろい文章である。現在の歴史教科書には、人物の逸話などがほとんど見られない。そもそも、歴史上の出来事は、それと関連する人物との逸話などから興味が沸き起こってくるものである。

『日本外史』も『近古史談』も、ともに明治三十五年の中学校教授要目に例として挙げられているものであるが、今日の漢文教科書からは姿を消してしまっている。当時、一般にもあれほど広く読まれた作品がまったく見られなくなってしまうという状況に何とか終止符を打つことはできないものか。このような状態が長く続けば、過去の文化遺産や伝

統といったものからは、いともたやすく断絶してしまう。

これからの世紀を担う国際人の育成のためには、過去の歴史の学び直しの上に立脚しての自国の文化理解を促進させる姿勢、というものが不可欠になる。そのためにも、これまでに見てきたような文章作品の中から、戦前までの教科書とは違った角度からの新たな選択眼をもって、再度、教科書教材としての価値を検討して再発見するという努力を、惜しまずに継続していくべきであると考える。

かつての漢文教科書には、今回取り上げた以外のものでも、興味深いものが多い。本論中では扱えなかったが、その一例として、宮本正實編纂『漢文読本』巻一（明治三十一年）の目次を、最後に資料として紹介したい（資料一）。人物の伝記を簡潔にまとめて載せているところが特徴である。また、本文の例として、原善「伊藤仁斎」を掲げておく（資料二）。分量的にも短く、それでいながら逸話からその人間像が浮かんでくる内容の部分が採られている。

最後に、この資料は、青木五郎先生のご教示によるものであることを記して、感謝の意を表したい。

- (1) 『栗山文集』巻一 一八四二年 桐陰書屋版
- (2) 『月瀬記勝』 一八九七年 有造館版
- (3) 『山陽遺稿』巻七 一八四一年 五玉堂版
- (4) 『息軒遺稿』 一八七八年版
- (5) 『宕陰存稿』 一八七〇年版
- (6) 『中洲文稿』第一集 一八九七年 二松学舎版
- (7) 『中洲文稿』第二集 一八九九年 二松学舎版
- (8) 『日本外史』 一八八三年版
- (9) 『近古史談』 一八九四年 富山房版

文學士宮本正貫編纂

# 中等漢文讀本

文學社

明治三十三年  
尋常中學校漢文科教科書  
文部省檢定

中等漢文讀本卷之一  
教科

## 目次

三種神器	藤田彪
崇神天皇	額襄
仁德天皇	額襄
山田古嗣	服部元喬
良岑安世	服部元喬
公助受禪	徳川光圀
片山北海	角田簡
學者之務	貝原篤信

本間資氏射覆

中井積徳

岩間大藏

大槻清崇

岩傳鐵砲

巖垣松苗

木谷久左衛門

安積信

稻葉一徹

大槻清崇

千利休

大槻清崇

石田三成

大槻清崇

紀平洲

東條耕

羅山強識

原善

除日講起

原善

伊藤仁齋

原善

川井東村

東條耕

鶴泉入室

角田簡

改過

貝原篤信

定家清肅

徳川光圀

細川幽齋

大槻清崇

義家學兵法

服部元喬

示教生

藤澤甫

讀書之法

雨森誠清

中江藤樹

原善



三宅尚齋妻	角田簡
湯淺常山母	角田簡
淺羽氏教育	角田簡
毛利元就	大槻清崇
北條泰時	賴 襄
中村揚齋	原 善
擇師友	貝原篤信
闇齋峭巖	原 善
安東省庵	原 善
貝原益軒	角田簡

貝原益軒肖影贊	佐藤 坦
橘良基	服部元喬
藤原保則	額 襄
僧西行	服部元喬
後三條天皇	額 襄
儉薄率物	服部元喬
板倉重矩	中村 和
本莊宗資	青山延光
題湖帆飽風圖	藤森大雅
忠勝辭封	青山延光

愛日	貝原篤信
題藤樹先生真蹟後	安積 信
送植原長谷兩生將之東京	山田 球
舞妓阿國	大槻清崇
示三上仲敬	柴野邦彦
快字說	篠崎 弼
猿說	齋藤 馨
義猴	芳野世育
上杉景勝	大槻清崇
福嶋三傑	岡田 僑
鳥羽僧正	服部元喬
樋口甚藏	角田 簡
學校	貝原篤信
學問思辨	貝原篤信
村甲茂十郎	尾藤孝摩
野中兼山	原 善
熊澤蕃山	原 善
忠興譬喻	鹽谷世弘
重宗寄巨燈	安積 信
新井白石	原 善

